

Title	神戸先生を憶う
Author(s)	堀江, 保蔵
Citation	経済論叢 (1959), 84(6): 489-500
Issue Date	1959-12
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/132711">http://dx.doi.org/10.14989/132711</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# 經濟論叢

第八十四卷 第六號

故名誉教授神戸正雄博士遺影および筆蹟・原稿

統計学＝社会科学的認識手段論の

問題点……………大 橋 隆 憲 1

資本主義の運動法則における

論理的なものと歴史的なもの(二)…吉 村 達 次 17

急速税務減価償却をめぐる

所得税会計の保守主義……………高 寺 貞 男 37

ヘンリ・ジョージについての一考察…北 沢 康 男 55

ソースタイン・ヴェブレンに関する

一研究……………中 山 大 68

神戸正雄先生による

再保険特約方式の輸入……………佐 波 宣 平 85

## 記 事

神戸先生御逝去 ……………91

追 憶 文 ……………96

新 村 出	井 藤 半 弥	本 庄 榮 治 郎	小 島 昌 太 郎
石 川 興 二	嵯 川 虎 三	大 谷 政 敬	小 山 田 小 七
堀 江 保 藏	島 恭 彦	松 井 清	

昭和三十四年十二月

京 都 大 學 經 濟 學 會

## 神戸先生を憶う

堀江保藏

京大経済学会は、戦前には財政も相当豊かだったので、年に一度、年末か年始に評議員の慰労会が開かれていた。場所は大い東洋亭かどこかのレストランで、日本式料理、いわんや粋なところで開かれたことは、一度もなかった。したがってアルコール飲料は精々ビール、酒の好きな先生もあったが、全然召し上らぬ先生も多かった。お隣の法学部のこの種の会とは、よほど趣きを異にしていたようである。経済学部の会が、このようにほとんどアルコール抜きになったのについては、神戸先生の牽引力がはずかって力があるのだというふうにも聞いた。それほど、私知ってからの先生は、酒税以外には、お酒に縁がなかった。

しかし、よく考えてみると、先生がお酒を召上るのを見たことが一度ある。それは、蜷川先生が助教授の筆頭であったとき、その音頭で「神戸先生に物をきく会」というのを山端の平八で開いたときである。蜷川先生の、「くつろいでもらう意味で一口召上っていただきたい」という言葉に応じて、先生は、小さなコップにつがれたビールを半分ほど、笑顔でもってあげられた。そして、助教授時代からの生活のことを淡々として話して下さったが、その中で、書生を置いた話、金が貯まれば家を買いかえた話など、今日では夢のような話が、いままお耳底に残っている。

今年の四月であったか、経済学部四十周年記念事業の用事で先生をお訪ねしたとき、先生に何か長寿法というようなものがあるかと尋ねた。すると、学校の仕事を家へ持ちこまなかったのもその一つだろうかと答えられた。なるほど、教授時代の先生は、朝八時には研究室に入り、五時になると退室されるという風で、参考書を読むのも原稿を書くのも、すべてこの時間内に研究室でやる、お宅では文字通り家庭生活を楽しむというようにしておられたらしい。時間の上でも場所の上でも公私をはっきり区別する。こうして心の平静が保たれる、これが私の長生きの原因ではなかったかと、先生は答えて下さったのである。それは実は長寿の原因であつただけでなく、「経済論叢」に毎号欠かさず、分量までほぼ一定した原稿を寄せられ、

「租税研究」全十巻をはじめとする老大な著述を書かれた先生の驚くべきエネルギーの源も、このようなところにあつたのではなからうか。

先生に最近お日にかかったのは、予定されている経済学部同窓会の機関誌「同好」ができたのを報告に行ったときである。その雑誌に、青山部長、島教授らと謀って同窓会規約の草案を載せたが、そこには名誉会長に関する個条がある。私は、同窓会が創立されたときには、先生を名誉会長という心づもりで、この個条を設けたのである。ところがその創立を待たずに先生は長逝された。がっかりせざるを得ない。「同好」の表紙の題字を先生に頂戴しておいたことが、せめてもの慰めである。

先生は京大経済学部になんらぬ愛着を持っておられた。戦後、先生のお誕生には、前教授に我々末輩をも加えて度々お招き下さった。経済学会の月例会や年次大会にも、時間と健康の許すかぎり、出席して下さった。昭和三十年の秋に開かれた大会の公開講演会で、私は「アメリカ経済管見」と題し、一席の旅行談を行ったが、そのときも先生は、うすら寒くなった夕方の教室で、最後まできいて下さった。その教室——第七教室——で、先生の告別式が、先生のお人柄にいとふさわしい形で行われたのである。